

その一方で禪宗に対しては、「悟り」とは「平気で生きて居る事であった」と自らの「誤解」を率直に認める柔軟さを見せている（第二十一回）。そこには禪宗を

① 帰依としてではなく思考の裏付けとして、あるいは

② 「平淡の中に至味」を見いだそうとする「写生といふ事」への過程としてとらえようとする子規特有の宗教観の存在が伺える。

本発表においては、

① 構成の分析

② 当時の社会背景及び子規と禪宗との関わり

③ 後半部「無門関」引用の意図と「苦」の意味について考察する。

《中国学》

「臥薪嘗膽」に関する一考察

博士後期課程一年 相原健右

春秋期の越王勾踐と吳王夫差との抗争は、中國はもとより日本においても、「臥薪嘗膽」という四字句として、現在に至り人口に膾炙している。一般的に、「臥薪」の故事は吳王夫差が、「嘗膽」の故事は越王勾踐がそれぞれ行ったこととして認知されている。

春秋時代後期の出来事とされる吳越の抗争については、古来より『春秋左氏傳』『國語』『史記』などの諸文獻に關係する記事があり、斯様な文獻によって當時の様を幾分か窺い知ることが出来る。が、『左傳』『史記』等の古史を記した文獻に「臥薪」に相當する故事の

記述が無いことは比較的知られている。このように、「臥薪嘗膽」説話の成立過程が未だ明らかでないのが現状である。以上から、今発表は「臥薪嘗膽」説話の成立について検討を試みるものである。

また、前漢初～中期の出土文獻とされ、文中に「臥薪嘗膽」説話にかかわる記述を含む、「短長」（明王世貞撰『弇州山人四部稿』所収）についても言及したい。

晋代の《隱逸の賦》をめぐる

——《隱逸の詩》との比較を中心に——

博士後期課程三年 小嶋明紀子

「隱逸」をモチーフとした文学は流行は後漢から六朝にかけてみられるが、その中でも東晋の陶淵明の作品は、「隱逸文学」を確立させたものとして従来高い評価を与えられている。しかし陶淵明以前にも「隱逸」をモチーフとした作品は多数存在しており、これらの作品が陶淵明の作品に与えた影響は小さいものではない。

特に、陶淵明が生きていた晋という時代には、「隱逸」をモチーフとした様々な文学作品が見られる。ゆえに晋代は、陶淵明に至るまでの「隱逸文学前史」を考える上で重要な時代であると考えられる。本発表では、隱逸をモチーフとした文学作品のうち、「賦」と「詩」とを取り上げ、時代的変遷を考察してみたい。併せて、「賦」「詩」それぞれの文体の特色についても考察したい。